本間文庫
文庫 14
A129

活魚二十六字詩上

京坂 如賓 自贊

○京都

わらふお顔でおぬぐ姿　いろと色との東山

○浪華

民のいきづかひにぎはふ烟　いまもおかりて煙たりけり

○名古屋

味は方領　みやーけ姿ぬくめてだ　たい寄のけぶ

○秋田

伊達侯ぶれ　ヤ子宮丈　ぶ草津　いきた上花御

○松島

塩釜じん　く　松島ほてる　えさほめたいさうでがす

新潟 二五

おけさ〳〵と桶かと見れば樽をたゝいて足拍子

結んだ書[illegible]あつす[illegible]

富山 二三

松江 桂浜

松江大橋白波が立ち風がおいふかれる[illegible]

門司 二四

もしも席出まずくと黒い黄金のおみなし

喜久の仲に蝦進言[illegible]

一刻千金夏でもゆくよかもりますか[illegible]の爪

出つくし

蝿[illegible]蚊子[illegible]かもし[illegible]

市長

松坂ゞよふ

宮夜の花[illegible]見れは[illegible]

[illegible]めの[illegible]

胸こた釘よし[illegible]ひうしろかりまする人の[illegible]

此奴ゞ[illegible]美人[illegible]

[illegible]

法華三十六字詩

白倉芳

大神呪

まろりすたよまろりすたみなかかとかの山

懺悔文

むかしのゆるさるこはきのとおよ今はさりしひひ髭反

功徳文

ゆーゆ秋ひいなれかれをしまおふくわけないなかし舟

回家文

えさまおかはり浮世のなりひ待てど里親の楽いね

御歌

[illegible]

甲子の年を迎て

火事は地震はおやぢ逃けたにけてうれい鼠帰

御りの松 新年ぢ、松の年ニ花柳界ニ

春は御りの松ひられーざんざあかてもとまち

毎の春 有名の宣春色なりて遊廓の一隅ニかれは一一 全部料理屋

春のかりかさい春なかりすけは三月なのいきなり

三絃

やら気二上りいき三下り浮気を調るこれ作

こた

うたをひくまい糸うたうまいつかずはなんすれのまき

妻之隠遁内ニ花柳界ニ

くろい衣の笠つた御山あかいけたーゥ踊て三ラ

天保後正世ニ黒衣宰相といれ情

○九　○十　二○　芭真治○

ひーく

三絃 弾りを向けまし いきなさんく 三味をひく

三位稲荷と隣の路周に朝から集くる人の達つて宣伝に精を出すを可らけた

金婚式 大正十二年九月 第八十二 第七十五

白い黒いの浮世を茶にし黄金花さく夫婦かれ

息災夫婦古今山谷堀七不思議の一人

一 年久しく浅草に住み震災の後根岸の里に移り住めば

浅草寺鐘に上野浅草が混然と依然目の辺にみ見えきかす上野の鐘の音に鐘の二律音を解説して居るを聞き

上野みなみに浅草きたよ 鐘もなるなる 今浅草

蝸なくなる小蚊につかれよられつたいよと蚕はかなし

昭和二年 中秋

某

弘も新なり

今 盛五十載 昔之金婚 余要倉田氏等 其存 巴葉開 賀宴 両得し

根岸門 五父四夫人 自 是則三室 第也 市先後 我 歌碑 昇一 一頭 半古

豊新府 都移 同岸 金屋 紀